

全国的な視野で環境問題に一貫してとりくみ、 狛江市でも多彩な市民運動に参加

気候危機打開、暮らし平和、人権守る



日本共産党 狛江市気候危機打開・SDG推進室長

重国たけし

いげくに 毅

重国たけしの歩んだ道

●自然豊かなまちの農家で



1970年、山口県徳山市（現・周南市）の農家に生まれました。実家では、トラクター、ミツバチなども飼い、春のタケノコ掘りや田植え、秋の稲刈り、味噌づくりや餅つきなどは一家総出で行ないました。近所の川ではウナギも獲れ、一面ヘイケボタルが飛び交っていました。小学生のときに左目をケガで痛め、視力がほとんどなくなりました。県立徳山高校に進学、登山部に所属し団体競技のメンバーとして中国大会で優勝した経験もあります。渓流釣りや自然散策が趣味の一つです。

●環境問題がライフワーク

実家に近い瀬戸内沿岸には化学工業等のコンビナートがあることも関係し、全国に公害で理不尽に苦しめられている人々が存在することに関心をもち、その解決の道を学びたいと埼玉大学工学部の環境化学工学科に進学しました。環境問題を考えるサークルに参加し、全国の熱い思いをもった学生と交流しました。この時の友人には今、環境NGOや市民団体などで活躍する人も少なくありません（その一人は、現杉並区長の岸本さとしさんと元同僚）。

●「平和と社会進歩」めざし
日本共産党に入党

学生時代は、広く社会のことを学びたいと社会科学を学ぶサークルにも参加。また全国学生寮自治会連合（全寮連）の委員長をつとめ、教育の機会均等や民主主義、学問の自由を守る運動にもとりくみました。そのなかで、平和と社会進歩をめざし、自らの成長を重ね合わせる生き

方をしたいと、21歳（大学3年生）の時に日本共産党に入党しました。

●「しんぶん赤旗」記者として

大学卒業後は日本共産党の「しんぶん赤旗」の学術・文化部記者となり、脳科学、素粒子科学など自然科学の最前線で活躍されている研究者や、諫早湾干拓工事（有明海）の問題点を指摘する学者、また、釣りキチ三平の作者、矢口高雄さんなども取材してきました。

●住民要求実現を応援する
「議会と自治体」誌へ



千葉県匝瑳市のソーラーシェアリングを視察

1998年からは、自治体行政の民主化、住民要求の実現を目的として発行されていた

る雑誌『議会と自治体』編集部に異動し、編集者として、環境問題や防災、産業振興などで活躍する地方議員や行政職員・業者・農民・住民運動を取り上げた記事を依頼・執筆し、研究者の論文掲載などにたずさわってきました。

●「ごみ半減、市民センター
改修問題」にとりくむ

日本共産党員市長だった矢野ゆたか市政（1996年～2012年）の、「市民が主人公」のまちづくりの魅力を感じ2000年に狛江市に移住しました。以来、狛江市の「ごみ半減推進審議会」の委員として、市民参加でのごみの徹底した発生抑制、

プラスチックの削減・資源化などにとりくんできました。気候危機非常事態宣言を行なうよう五百人の賛同者とともに市に求めるとりくみも進めました。「市民センター（公民館・図書館）を考える市民の会」の世話人として、市と市民の協働事業として「市民提案書」の作成に参加。いま、中央図書館の分割移転という「市民提案書」を大きく逸脱した市の「市民センター等改修基本方針」の見直しを求めています。

●人権尊重条例検討委で提案

高橋前市長のセクハラ事件の反省を受けて設置された市の「人権尊重基本条例検討委員会」にも参加。「市民の生きづらさに行政が向き合うことが大切」と提案。条例の名称に「人権を尊重しみんなが生きやすい狛江をつくる基本条例」という形でとり入れられました。

●子ども食堂のお手伝い

すべての人が居場所と出番を得て活躍できる、それぞれの条件に合わせて成長できる社会の実現へ、精神障害者団体の活動や学習会にも参加。共生食堂「ごはんと居場所おかえり」でも設立当初からお手伝いをしていきます。

●ハイタウン管理組合で

居住するマンション（ハイタウン）では、管理組合役員として広報誌の充実や環境衛生委員長としてマンションの公園でのガーデニング、ごみ問題のとりくみも行なってきました。

●新しい市民派市政実現、
未来への展望を拓く

いま、狛江市政の民主的发展と新しい市民派市政の実現のために、また大軍拡と大増税「戦争できる国」に突き進む自公政治を終わらせ、暮らしと平和を守る新しい社会、未来への展望を切り拓くため、先頭に立って奮闘しています。

